姫騎士アイーシャの野望～愛する王子様を玉座につけるのだ！～

rimaHameln

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

絶世の美貌と天性の才知を誇る姫騎士アイーシャ。

しかしプライドが高く、底意地の悪い冷酷な彼女に心から優しくしてくれるのは若き王子クルジュだけだった。

そんな愛するクルジュにアイーシャは報いるために、彼を王にすることを決意した。

才覚の限りを尽くして愛する若き王子を玉座につけるのだ！

頑張れアイーシャ！　政敵も恋敵も蹴散らして想いを成就させろ！

行け行けアイーシャ！　どんな手段も愛のためなら許されるぞ！

小説家になろうでも掲載

目次

一幕 ―― 1
二幕 ―― 5
三幕 ―― 10
四幕 ―― 15
五幕 ―― 20
六幕 ―― 26
七幕 ―― 32
八幕 ―― 39
九幕 ―― 45
十幕 ―― 51
十一幕 ―― 57
十二幕 ―― 65

幕間 バラバ王朝史1 ―― 71
幕間 バラバ王朝史2 ―― 74

一幕

真暦１９７１年。
東方のバラバ王国は大王（シャー）ハリードの活躍により長きに渡る戦乱を収め、再びの安定を手に入れようとしていた。
勇敢な息子達、賢い妻達、そして忠実な家臣の助けを得た大王（シャー）ハリードの統治でバラバ王国は平和へと向かおうとしていた。
そして、王都アジナバールの宮殿。その一画にある庭園に二人の人がいた。
一人は王の末息子クルジュ、もう一人は大貴族イサウロ家の姫アイーシャである。
幼馴染みの二人は噴水のほとりに腰掛け、時折手で水面をぱちゃぱちゃと跳ねさせている。一見すると絵になる構図だが、天上の星々もかくやの美しさであるアイーシャに対し凡庸な顔立ちのクルジュなのでいまいちサマにならなかった。
【クルジュ】「僕も１５歳になって成人の儀も済ませたし、そろそろ初陣なのかなあ」
【アイーシャ】「そうですね。時期としてはもう間もなくでしょう。いずれ陛下からお達しがあると思います」
【クルジュ】「やっぱり、そうだよね。でも怖いなあ……僕、戦うの苦手だしさ。稽古で

も負けてばっかりだしさあ」
【アイーシャ】「殿下は軍の指揮官になられるお方。前線で戦う必要などありますまい」
【クルジュ】「でも用兵の練習でも上手くいかないんだ。こっちも負けてばっかりさ」
【アイーシャ】「練習は練習、実践は実践です、殿下。戦に於いては練習が上手いからといって実践出来るとは限りません。逆もまた然りです」
【クルジュ】「あはは、慰めてくれてありがとう。アイーシャはいつも優しいなあ」
【アイーシャ】「い、いえ、慰めているのではなくて……その、わたしは本当にクルジュさまを信じているのです！　あなたは出来ます！」
【クルジュ】「そうかなあ……でもありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ、あははは」
【アイーシャ】「クルジュさま……」
【クルジュ】「あはは、はぁ……でも正直アイーシャが凄く羨ましいな。アイーシャは僕と同い年なのにとっくに初陣も果たして、軍も指揮してるし、剣も馬も抜群に上手い。父上もアイーシャの助言を有難がってる」
【アイーシャ】「運が良かっただけです、殿下」
【クルジュ】「そんなこと無いさ。実力だよ。アイーシャは天才だもんね」
【アイーシャ】「天才などでは……出来ないことも山程あります。ただ神が助けて下さっただけです」

【クルジュ】「ならアイーシャは神様に認められてるんだよ。羨ましいなあ……僕なんか何にも出来ないし、せめて皆の足手まといにならないようにしないと」
【アイーシャ】「クルジュさまが足手まといなどと！　ありえません！」
【クルジュ】「あ、ありがとう。でもさ、もし何かあった、僕がやっぱり駄目だったら、アイーシャ、助けてくれる？　なんてね、あはは」
【アイーシャ】「勿論です！　クルジュさま、わたしは常にあなたのお側におります。どんな時でも、どんな場所でもです。必ずです！　お誓い致します！」
【クルジュ】「あ、ありがとう。やっぱりアイーシャは優しいなあ。アイーシャのそういう所、僕好きだよ」
【アイーシャ】「は、はい！」
【アイーシャ】（ああ、クルジュさま……優しいのはあなたです。わたしにこんなに優しくしてれるのはあなただけ。ああ、好きです！　大好きです！）
　笑顔を向けるクルジュにアイーシャの頬は熱く、赤くなっていく。
　言うまでも無い事だが、才女アイーシャは王子クルジュに恋していた。
【アイーシャ】（わたしは本当にあなたを愛しているのですよ。その証明に必ずやあなたを王にしてみせます）
　それも並々ならぬ愛情を注いでである。

【アイーシャ】（あんな老いぼれ王やクルジュさまの兄を名乗るクズ共なんかよりずっとずっとずーっとあなたの方が王に相応しい！）

末の王子であるクルジュの継承順は低い。もし彼が王位を手に入れるとするとしても、それは王と兄王子達が消えてからの話である。

【アイーシャ】（ああ、クルジュさま。ほんのすこしだけ待っていてね。直ぐにあなたに玉座を贈ってあげるわ。あなたに輝ける未来をあげる！　そして、そして、そうなったら、きっとクルジュさまはわたしを妻に……きゃっ、わたしったら、はしたない！）

顔を赤くさせてニヤニヤするアイーシャを見るクルジュ。ニコニコと笑顔を浮かべるその裏には……

【クルジュ】（アイーシャ、何だか分からないけど嬉しそうだなあ）

特に何もなかった。クルジュとはそういう人だった。

良くも悪くも純粋な若者二人。彼ら、いや彼女らがどの様な存在となり、歴史に影響を与えていくのか。そして、何より恋は実るのか。今はまだ神のみぞ知ることであった。

二幕

王都アジナバール。宮殿の一画、玉座の置かれた謁見の間。
そこには大王(シャー)ハリード、王太子マルドゥーン、第二王子ハサン、第三王子ダリウス、そして末の王子クルジュがいた。
ハリード王は親族だけを集めた御前会議を度々行っていた。重要事を事前に決めておこうという目的もあったが、何よりも身内同士の協調を重視してのことだった。
【ハリード】「よし、皆集まったな」
傷だらけの無骨な風体。白髪交じりの髪。威厳に満ちた態度。
大王(シャー)ハリードは見た目通りに正しく歴戦の老王である。
【マルドゥーン】「父上、今日の議題は如何なものになりましょうや」
王太子マルドゥーン。父王ハリードに良く似た壮年の男だが、何処か悲観さが漂っている。
【ハサン】「今話さねばならないことといえば、北の奴ら族(ナグハ)の件ですか?」
鋭い目付きのこの細身の男は第二王子のハサンである。一目で頭の切れ味の良さと、同じ位に冷酷さが伺える。

【ダリウス】「おお、ならば戦か！　戦争の話ですな、父上！」
　第三王子のダリウスが期待に満ちた大声を上げる。隆々とした肉体の巨漢で、如何にも戦いを好む猛者らしい。
【クルジュ】「い、戦ですか。も、もしかして、僕も……」
　王子たちはダリウスとクルジュを除いてあまり似ていなかった。それもその筈でマルドゥーン、ハサン、ダリウスとクルジュはそれぞれ母が違うのだった。
　ハリードには三人の妃がおり、身分も家格も違うその三人ともが王子を産んでいた。
【ハリード】「急くな。その件もあるが、別の重要事もあるのだ」
【マルドゥーン】「は、失礼致しました、父上」
【ダリウス】「戦より重要な事は何ですか、父上！」
【ハリード】「急くなと言っておろうが。では本題に入るが、クルジュ。お前も成人の儀を終えて国政に携わる歳になった。そこでお前には太守を務めて貰う。トゥラノ州のだ」
【クルジュ】「えっ、僕、あ、いや、私がですか!?」
　バラバ王国はその広大な領土を幾つかの州に分けて統治していた。長い歴史と戦乱の中で統廃合を繰り返してきた州であったが、この時代になっても統治制度の基盤となっていた。そして太守とは州の長官の事である。

【ハリード】「そうだ。無論お前一人ではない。ダティス将軍を補佐に付ける。それとイサウロ家のアイーシャもお前に同行し統治を手助けする。彼女らならば十分にお前を導けるだろう」

【ハリード】（イサウロ家の人間をこれ以上王族に近付けさせたくないが仕方ない。アイーシャは確かに天才だ。今回の太守の件も既に彼女が整えているし、万事準備済みだからと進言して来たのも彼女だ。それにアイーシャには色々と役立つ情報も貰っている。尋常ならざるあの女を敵に回すのは得策ではない。願いを却下するのは難しい）

イサウロ家は大貴族であり、金銭・兵・婚姻も含めたあらゆる形で王家への影響力を維持している。

大勢力の協力を必要としているが王家の力を高めたい大王（シャー）ハリードには何とも扱いに困る存在だった。

【ハリード】（とはいえ、そろそろクルジュに経験を積ませるには調度良い機会でもある。辺境で戦や政治を確りと学んで貰わなくてはならない。クルジュが成長したらより重要な州を任せよう）

重要州の太守は王族が務めるのが常だった。

王太子マルドゥーンは強兵の地バクトラ州の太守を。
第二王子ハサンが最も富めるシラエア州の太守を。
第三王子ダリウスは西の前線ゴンディノ州の太守をそれぞれ任されている。
そして王都アジナバールのあるペルシス州はハリード自らが担当していた。
【クルジュ】「た、太守。僕が太守、に」
【ダリウス】「ガッハッハ！　やっとお前も表舞台に出て来たな！　初陣は何時になるかな、楽しみだ！」
【クルジュ】「う、初陣。そ、そうですよね。やっぱり戦いはありますよね」
【ダリウス】「当たり前だ！　戦場だからな、あっちの方の”初陣”もきっと近いぞ！」
【クルジュ】「ダ、ダリウス兄さん！」
【ダリウス】「ガッハッハ！」
顔を赤くさせたり青くさせたり忙しないクルジュと豪快に笑うダリウス。
クルジュとダリウスは母が同じという事で兄弟仲は悪くなかった。色々な意味で裏表の無い者同士だからということもあった。
【ハサン】「……」
【ハサン】（彼女ら、か……あの女の差金（アイーシャ）だな。イサウロ家め、どこまで食い込むつもりだ？　だがトゥラノ州といえば辺境ではないか。象牙の国（オドニア）との交易拠点ではあるが、統

治も面倒で気候だって王都（アジナバール）の様に快適ではない。もっと中央に近い州か実入りの良い州に影響したがると思ったがな）

【マルドゥーン】「いきなりトゥラノか……父上も人が悪いですな。あそこは平定なってからまだ日が浅い。叛徒や蛮族どももまだ多い。クルジュには辛いのでは？」

【ハリード】「だからこそだ。困難な地でなくては意味があるまい。それに儂の息子だ。責務は果たせる。そうであろう」

【クルジュ】「はい、父上の御期待に沿って見せます！　アイーシャもいてくれますし、必ずや！」

　意気込むクルジュを各々の想いと共に見つめる王と王子たち。その姿は団結した家族そのものであった。

　この時はまだ。

三幕

【ハリード】「クルジュの件は今の通りだが、それともう一つある。分かっている事と思うがナグハ族に関してだ」

ナグハ族は王国北東の騎馬民族である。荒野に住まう彼らは豊かなバラバ王国を狙って侵入してきたのだ。

近隣のオアシス都市群を荒らしたナグハ族はそれだけで飽きたらず、遂にバラバ王国領のソグディノ州へ侵入し略奪と襲撃を繰り返していた。

王国を再統合したとはいえ未だ戦乱冷めやらず、戦争の傷跡が多く残るバラバ王国にとっては決して見過ごすことの出来ない侵入者達であった。

【ダリウス】「ナグハ族など俺が蹴散らしてやる！　少しは骨のある連中だろうな！」

【ハリード】「静まれ、ダリウス。今回の戦はマルドゥーンに任せる。儂もハサンもお前も出征せぬ」

【ダリウス】「な!?　親父!!」

【ハサン】「……」

【マルドゥーン】「自分だけ、ですか。連中は2万は下らない程の数と思われますが、此

方の兵力は如何ほど使えるのです？」
【ハリード】「お前のバクトラ州の兵は最大限使って構わん。必要があれば近衛兵も貸そう」
【クルジュ】「近衛兵！　凄い！」
　大王ハリードの近衛兵は精鋭を以って知られる王国最強の部隊である。強兵で名を馳せるバクトラ兵も近衛兵には後れを取る。
　大王の行所には常に共にあり、数多の戦場を駆け抜けて武勲を立ててきた英雄達だった。
　真紅のマントをたなびかせる彼ら近衛の騎士達に憧れる若者は多い。クルジュもその一人だ。
【マルドゥーン】「近衛も？　そこまでの事態にはならないと思いますが」
【ハリード】「いいのだ。それに必要があればだ」
【ダリウス】「親父！　何だってマルドゥーン兄だけなんだ！　俺も戦わせてくれ！」
【ハリード】「静まれ、ダリウス」
【ダリウス】「だが、親父！　今までは俺達も戦ってきたじゃないか！　なんで今度だけ！」
【ハリード】「静まれと言っている。これは命令だぞ」

【ダリウス】「う、むう……」
【ハサン】「……つまり、総司令官の代理というわけですか」
【ハリード】「そういう事だ。皆良いな。マルドゥーンも心して掛かれ。決して弱体な敵ではないぞ。荒野を住処とするナグハ族は生活全てが戦いの様なものだ。これまで戦ってきた叛徒共ともまた違った強さがある」
【マルドゥーン】「分かっております。必ずやナグハ族を打ち破り、王国の平和を確かなものにしてみせます」
【クルジュ】「マルドゥーン兄さん！　御武運をお祈りしております！」
【ダリウス】「ウムム……父上の命令なら仕方ない……」
【ハサン】「……」
【ハリード】「頼んだぞ、マルドゥーン」
【ハリード】（マルドゥーンよ、我が第一の息子、王太子よ。今回の戦で勝利すればお前は外敵から王国を守った英雄として記憶される。ナグハ族がこれまで儂らが戦ってきた様な叛徒や王位僭称者と最も違う点はこれだ）
【ハリード】（臣民はお前こそを真なる王者として見るだろう。そうすればお前は弟達とは決定的に上位に立てる。そう、儂すらも超える王になれるのだ。儂はお前にこそ、愛するシーリーンの子であるお前にこそ王国を受け継がせたいのだ）

【ハリード】（そして、王国を受け継がせ、平和に導かせるためには兄弟同士の争いだけは何としても避けなければならん。儂もこれまでの戦でどれ程肉親の血を流してきたか……）

長い戦乱の中で兄弟親戚と争ってきたハリード王は身内同士の骨肉の争いに嫌気が差していたのだ。

王位や領地を巡って殺し合いを続け、それが如何に愚かしく哀しい事であるか、身を持って思い知らされていた。臣民にも多大な害をもたらす事も理解していた。

少なくともハリード自身はそうであった。

【ハリード】（戦しか見ないダリウスと幼いクルジュは兎も角として、ハサン……あの毒婦の倅に王位を取られないためには儂も出来る限りの事をしてやらねばならん。心して掛かれよ、マルドゥーン）

◇　◇　◇

御前会議の後。宮殿の廊下を歩く王子二人、ハサンとダリウス。片や鋭い目付きで何かを思案し、片や震える程に怒気を発散している。

【ダリウス】「ぐぬぬ！　何故親父は俺を戦争に行かせてくれんのだ！　何故マルドゥーンだけなんだ！」

【ハサン】「そんな事も分からんのか、ダリウス」

【ダリウス】「分からん！　ああ分からんとも！　一体どういうことなんだ、兄者！」
【ハサン】「今回の戦はな、何よりもマルドゥーンの為の戦なのだ。彼奴に王太子としての泊をつけるためのな」
【ハサン】（そして俺達が王位を狙えないように彼奴に権威をつけて、偉大にさせておくつもりなのだ、父上は）
【ダリウス】「何だと！　そんな事せんでもマルドゥーンが長子なのだから、彼奴が次の大王だろう！　面倒なことを！　それより俺を戦に出すべきだ！」
【ハサン】「……そうだな」
【ダリウス】「そうだろう！　全く！　俺が戦争に行かなくてどうするのだ！」
【ハサン】（どうもせん。ただの猪として朽ちていくだけだ。此奴と話していても何の益も無い。半分は俺と同じ血が流れているとはとても思えんよ）
【ハサン】（それにしてもマルドゥーンめ。奴隷の子は奴隷らしくしておれば良いのに、許せん。大王には俺の様な人間こそが相応しいのだ……マルドゥーンでも、父上でも無くな）

四幕

真暦１９７１年。

アイーシャの進言によって辺境の地へと向かう事になった末の王子クルジュ。その準備も日取りも全てアイーシャによって整えられており、クルジュ自身はただ心の準備をしているだけで良かった。

そして、王子の出立ともなれば豪勢な宴が付き物である。山程のご馳走、出立に向けての贈り物、そして見送りの客人達だ。

宴のホストである末の王子クルジュは初めての大役に緊張し、困惑していた。たどたどしく答えるクルジュをアイーシャは脇から囁き、手助けしていた。

クルジュはただ言いなりでいるばかりではなく、自分の力だけど対応しようともした。しかし彼の器量では相手のペースにすぐ乗せられてしまうのだった。だが、そこでもすかさずアイーシャが助け船を出して王子を救援していた。

【クルジュ】「ふう、ありがとう、アイーシャ」

【アイーシャ】「勿体無いお言葉です。殿下をお助けするのが、私の使命で御座いますから。それに、そもそもあの様な分不相応な物言いをする奴らこそが悪いのです」

【アイーシャ】（クルジュさまに迷惑を掛けるなんて。彼奴等は後で必ず殺すわ。だから心配しないでね、クルジュさま！）
【クルジュ】「うーん、でもちゃんと言葉を返せない僕が駄目なんだよなぁ。やっぱり、アイーシャがいないと僕は駄目だなぁ」
【アイーシャ】「ク、クルジュさま」
【アイーシャ】（も、萌え死にそう……今すぐ抱き締めてナデナデしたいっ！　思いっきり！）

そんな二人に近付く者達がいた。近付く者を見るとクルジュの顔がぱっと明るくなり、思わず立ち上がった。
【クルジュ】「キュロス義兄さん！　ファーティマ姉さん！」
【キュロス】「クルジュ！久しいな！それにアイーシャも」
【アイーシャ】「クルジュ、久しぶりね。……後、アイーシャも」

ファーティマはクルジュの同母姉で、キュロスはその夫である。そして、キュロスはイサウロ家の長男でもあり、アイーシャの兄であった。

ファーティマはクルジュに似ず堀の深い顔立ちで、女だてらに剛気な振る舞いで知られている。キュロスは妹アイーシャと比べると顔も才能も天と地ほどの差があったが、それは比べる対象が悪いのであって戦士として十分な評価を受けていた。

【アイーシャ】「……よくいらして下さいました」
【アイーシャ】（またクルジュさまにたかるハエが増えたわ）
　アイーシャは彼らの何方も嫌いだった。
　露骨に敵意を示しあうファーティマは言うに及ばない。キュロスは兄として相応の愛情を向けてくれるがそんな事はアイーシャには関係無いのだった。
【キュロス】「いや、全く目出度いことだ。あのクルジュ坊やが出陣とはな」
【ファーティマ】「ほんとよね。おもちゃ片手に遊ぼう遊ぼうってじゃれついてきたクルジュがねぇ」
【クルジュ】「ね、姉さん！」
【キュロス】「はっはっは、恥ずかしがるな！　褒めてるんだからな。皆お前の事を誇りに思ってるぞ」
【ファーティマ】「そうよ。クルジュ。だからシャキッとしなさいな。あんな馬鹿貴族共に言いようにされてんるじゃないの！」
【クルジュ】「み、見てたんですか……もう嫌だなあ」
　今、クルジュの心はファーティマとキュロスに向いている。自分ではなく。先程までは自分にだけ向いていたのに。
【アイーシャ】（そんな有象無象の連中じゃなくてわたしを見て！）

その事はアイーシャの心を激しく掻き乱す。妬みと憎しみの炎が吹き荒れる。クルジュ王子の手前、二人を睨みつけ無いように耐えるのに必死だった。

アイーシャの内心など露知らず、三人は暫く談笑を続けていた。

【キュロス】「頑張れよ、クルジュ。それと……」

【キュロス】「お前も〝頑張れ〟、アイーシャ」

【アイーシャ】「兄様……」

【アイーシャ】（キュロス兄様ったら、もう……普段は駒として利用するぐらいしか価値の無い役立たずなのに、偶には良い事してくれるのねっ！）

アイーシャは僅かに兄への評価を上げた。人の恋路を応援する者に幸あれかし。

【ファーティマ】「気を付けない、クルジュ。あんた、鈍臭いんだから、無茶しちゃ駄目よ。それに、戦場以外だって危ないのよ。色々と〝気を付けなさい〟」

ファーティマがちらりとアイーシャの方を見る。

【アイーシャ】（この雌豚も何時か必ず冥界送りにしてやるわ）

ファーティマへの評価は地の底で、これ以上下がりようがない。人の恋路を邪魔する者には死あるのみ。

【クルジュ】「もう、酷いなあ、ファーティマ姉さん。でも大丈夫ですよ、アイーシャが一緒ですからね。彼女がきっと守ってくれますよ」

凡庸な顔付きだが屈託の無いクルジュの笑顔。そこにはアイーシャを虜にするだけの、心の美しさがあった。

【アイーシャ】（クルジュさまぁ～！　ああ～、この笑顔だけで生きていけるわぁ～）

◇　◇　◇

豪勢な見送りの宴を終えて、王子クルジュは王都を発った。1万人もの軍勢を率い、姫騎士アイーシャの補佐を受けてである。行き先は東南のトゥラノ州。未だ反乱者と蛮族の跋扈する辺境である。

若きクルジュとアイーシャが如何ほどの活躍を見せるのか。それはまだ神のみぞ知る。

五幕

真暦１９７１年６月、王都アジナバールを発ったクルジュ率いるバラバ軍は南東へ向けて流れる　河沿いに南下を続けた。道中はアイーシャが既に万全の準備を整えており、進軍は全くと言っていいほど順調だった。

河の水運を利用できたことも大きく、ベビュラ・マガンディノ両州を労せず通過していった。

クルジュの軍勢は騎兵４０００騎と歩兵６０００人から成り、半数はアイーシャのイサウロ家が集めた兵である。王家と同数の兵を繰り出すというイサウロ家の威勢の強さが伺える。

先頭を行く旗には”火を噴く鋼の筒”の意匠が織り込まれている。王家の主神である炎と鉄の神”ジェタ”の象徴であり、同時にバラバ家の意匠にも取り入れられているのだ。

【クルジュ】「……」

【アイーシャ】「どうなされました、クルジュ殿下？」

【クルジュ】「いや……やっぱり初陣だしさ。ほら……」

【アイーシャ】「ああ、成る程。ですが、クルジュ殿下なら立派に役目を果たせます。私もお助けいたします」
【アイーシャ】（ドキドキしてるクルジュさまを見ると、わたしもドキドキしちゃう！）
【クルジュ】「ありがとう。でも緊張するなあ……ここはまだ敵地じゃないから大丈夫だけど、もうすぐ戦地だもんなあ」
【アイーシャ】「戦闘なんて、そう大したものではありませんよ」
【クルジュ】「え？」
【アイーシャ】「兵が動き、武具か打ち合わされ、多少血が流れるだけです。それ以上ではありませんから」
【アイーシャ】（クズと雑魚が大勢集まるだけだもんねぇ。戦争なんて別に面白くも何ともないですよ？）
【クルジュ】「そ、そうかなぁ……」
【アイーシャ】「そうですとも」
【アイーシャ】（やぁーん！　不安で緊張してるクルジュさまもいいわぁ～！）
　これを利用してクルジュに近付こうとするアイーシャ。彼女も年頃の乙女、いじらしい所もあるのだった。そして死も血も、他者のものである限り、アイーシャの心に響くことはないのだ。

軍馬に揺られながら何ともガチガチな表情のクルジュ。そんなクルジュに一人初老の男が近づいて行き声を掛けた。

【ダティス】「ご心配召されるな殿下」

この初老の男はダティス将軍。ハリードの旧友であり決起時から従う宿将で文武両道の名将である。彼もまたアイーシャのことは嫌いだったが、剛気な武人らしく、その有り余る才覚は認めていた。

【アイーシャ】（ッチ！　良いところだったのに、わたしとクルジュさまの間に入ってくんじゃねえわよ！　糞爺！）

アイーシャの方もまた、他の連中に対すると同様に、ダティスには何の好意も抱いていなかった。

【ダティス】「父王君は殿下の遠征に強力な兵を付けて下さいました。これだけの数の装甲騎兵（カタフラクト）や騎兵がいれば辺境の反乱軍など恐れるに足りません。騎兵達を支える歩兵も十分な数がおります」

騎兵は鱗鎧に身を固めた装甲騎兵（カタフラクト）１０００騎、弓や投槍で戦う軽装騎兵（シパーヒー）３０００騎から構成されている。

騎兵はバラバ軍の主力であり、特に装甲騎兵（カタフラクト）は膨大な維持費が掛かる反面、戦場においては凄まじい威力を発揮する。

歩兵は様々な地域から集められた槍兵３０００、弓兵３０００から編成された。
複合弓を装備する弓兵は相応に強力だが、槍兵は弱体で盾の壁で非常時の逃げ込み先を作る程度の役割しか期待されてはいない。
【クルジュ】「う、うん、そうだよね。これだけの兵力があるんだから大丈夫だよね」
【ダティス】「そうですとも。”我らの”兵の力は確かです」
【アイーシャ】「……そうね、確かに”私達の”兵は強い」
【アイーシャ】（兵の半分を出してるのはわたしのイサウロ家でしょうが。クルジュさまの出征なんだから出して当たり前だけど、勝手に持ち主を騙られるのは実に気に入らないわ）
【ダティス】「む……」
【クルジュ】「そうだね！　”僕達の”戦士なら大丈夫だよね！」
【ダティス】「……そ、その通りです、殿下」
【クルジュ】「？」
不安の和らいだクルジュは屈託のない、純朴な笑顔を見せた。彼はアイーシャとダティスの今のやり合いに、引いては王家と大貴族イサウロ家の抱える関係の歪みに何も気付いていない。
【アイーシャ】「うふふっ……その通りですわね、”貴方の”軍です」

【アイーシャ】（こういう純なところも魅力よね。可愛いところばっかりだわ！）
【クルジュ】「それと、向こう（トゥラノ）へ着いたら直ぐに戦いになるのかな。反乱軍は相当な戦力を集めているんでしょう？」
【ダティス】「はい、殿下。以前叩きのめしたのですが、どうやら足りなかったようです。連中の首魁ゴンドファルネスの元に数千の兵が集まっております」
【クルジュ】「数千……」
【ダティス】「トゥラノ州の都ガズナが危機にあります。彼の地はトゥラノの中心にして拠点。落とす訳には参りません」
【アイーシャ】「いいえ、ガズナなど取るに足りません。敵が獲るというのならばそれでいいのです」
【クルジュ】「え？」
【ダティス】「え？」
　突然のアイーシャの言葉にはクルジュだけでなくダティスも驚いた。
【ダティス】「アイーシャ殿は何を仰られるのか。ガズナを確保せずなんとするのか。トゥラノ州の中心都市であるぞ」
【アイーシャ】「それは分かっている。だがそんな事はこの戦いに於いては末節に過ぎないのです、ダティス将軍」

【ダティス】「しかし、戦略的には……」
【アイーシャ】「なればこそです。戦略的にはガズナの確保に拘ってはいけないのです。それに最終的にはクルジュ殿下が策を採択なさいます。私の策に不備があれば、クルジュ殿下が受け入れることは無いでしょう」
【ダティス】「……」
　ダティスは不満気な顔だった。アイーシャがクルジュの権威を利用した様な物言いをしたのが気に入らないのだった。アイーシャ自身は本心で言っただけだとしても。
【クルジュ】「まあ、アイーシャの言うことなら、大丈夫だよ！　アイーシャが間違ってたことなんて、僕は知らないな」
【ダティス】「……殿下の御命令に従います」
【アイーシャ】「殿下……」
【アイーシャ】（あ〝あ^〝あ〝ぁぁ〜〜……クルジュさまの信頼で溶けるぅぅ、身も心も溶けちゃうぅぅ〜）
　有形無形の軋轢を抱きながらクルジュら反乱討伐軍は一路トゥラノ州へ向けて進軍を続けていた。

六幕

トゥラノ州の諸豪族はハリード王の攻撃で一度は屈したが、王と主力軍が去ると威勢を盛り返し瞬く間に反乱を起こした。当初は豪族達もそれぞれ単独に反乱を起こし、各個撃破されていた。

しかし、トゥラノ豪族の一人ゴンドファルネスが指導力を発揮して反乱軍や蛮族達を纏め上げると一点してその勢力は脅威といえるだけの大きさを持つように為った。

現地のバラバ王国軍は状況打開の為に打って出たがゴンドファルネス率いる反乱軍に敗れ、逼塞させられていた。州都ガズナも反乱軍の手が伸びつつ有り、予断を許さない状態になっていた。

真暦１９７１年６月にはクルジュ軍はトゥラノ州へと到達した。

トゥラノ州へ入ったクルジュ軍だが、反乱軍は直接には手を出さなかった。反乱軍は地理に明るいことを活かし、クルジュ軍の背後を遮断しようとしたり、食料調達部隊を妨害したり、小規模な夜襲や朝駆けを繰り返すなどゲリラ攻撃を主体にしていた。クルジュ軍の被害は小さかったが、ゲリラ攻撃を仕掛ける敵軍を撃破しきれていなかった。

アイーシャは軍勢をガズナへの道中で停止させ、ガズナに居た州の防衛指揮官を呼び

出した。そしてクルジュやダティス将軍らとともに反乱軍撃破の為に軍議を行っていた。

　司令官用の天幕。将軍が指揮官達全員が集まれるほど大きさがある。中には軍勢の指揮官達が勢揃いしている。軍議は始まって時間はさして経っていないにも関わらず、場の空気は熱気を帯びていた。アイーシャの提示した策が理由であった。

【ナサール】「……申し訳ないが、アイーシャ殿は今何と仰られたか」

　ナサールはトゥラノ州現地軍の指揮官である。大王（シャー）ハリードに当面の後事を託されただけあって能力に不足はないが、征服間もない敵地での戦いに苦慮していた。

【アイーシャ】「ガズナを放棄すると言ったの。何度も言わせないで」

【ナサール】「馬鹿な！　最重要拠点だぞ！」

【クルジュ】「ガズナは州都だよね。大丈夫なの？」

【ダティス】「一般的な兵法に照らし合わせれば、大丈夫ではありませんな」

　現地指揮官のナサールは勿論だが、クルジュやダティスもアイーシャの真意を測りかねていた。

【ナサール】「ガズナはトゥラノの中心だ！　みすみす譲り渡すなどゴンドファルネスが勝ったことになってしまう！」

【アイーシャ】「だからこそよ」

【ナサール】「何だと、どういうことだ」
【アイーシャ】（チッ！　何でわたしが一々アンタ何かに教えてあげなきゃならないのよ。まあ、クルジュさまも聞きたがってるみたいだから、話すけど）
【アイーシャ】「ガズナが手に入るとなればゴンドファルネスも奴が従える叛徒共も姿を表すでしょう。そしてガズナを手に入れて戦いに勝ったと思えば、今度は勝利の果実を巡って奴ら同士の争いが始まる。勝利と抵抗の立役者と言ってもゴンドファルネスは所詮豪族の筆頭程度の立場でしかないのだから、他の連中が追い落としにかかるのも不思議じゃない。そして自らの権威と立場を維持するためにゴンドファルネスはまた勝利を必要とするわ」
　アイーシャの策の真意にナサールもダティスも黙って聞いている。だがもう一つの真意にはまだ気づいていなかった。
【アイーシャ】「ゴンドファルネスは勝利の為に、部下が離叛したり裏切ったりする前に兵を纏めて打って出てくる。そこを討ち取れば良い。全て打ちとってしまっても構わないし、頭目を失い敗北した賊徒何て大した事は出来ないのだから追い散らしても良いわ」
【ナサール】「貴殿の考えは分かった。仮に有効な手だとしても、それでは栄光有る王国軍、引いては国王陛下の武勇に傷を付けてしまう」

【アイーシャ】「いいえ、そうはならない。何故ならガズナは貴方が勝手に捨てるから、よ。貴方は援軍が迫っているにも関わらず、自陣の劣勢に追いつめられて撤退するのよ。我軍はここにいるから、貴方は兵を率いてここまで逃げていらっしゃい」
【ナサール】「な、何だと！　それでは我が名誉、我が武功はどうなる！」
【アイーシャ】（はあ？　アンタの事情なんてクソほどの価値もないのよ。そんなのも分かんないの？）
【アイーシャ】「貴方の武功？　既にゴンドファルネスに負けてるのでは無くて？　今更気に出来る名誉とやらなんて残っているのかしら？」
【ナサール】「ぐっ……」
【アイーシャ】「どうせ拭えないだけの恥は晒してるのだから重ねて上塗りしたところで何も変わらないでしょう」
　余りの物言いに顔を真っ青にして怒りと屈辱に振るえるナサール。彼とて好んで負けたり苦戦したりしている訳ではない。だがそんな事はアイーシャには微塵も関係ないのだ。
【クルジュ】「ま、まあまあ。アイーシャもナサール殿も落ち着いて。取り敢えずその作戦が有効かどうか考えよう。ダティス将軍はどう思う？」
【アイーシャ】（ああもうクルジュさまったら。そんなクズの事なんかわざわざ気にかけ

なくったっていいのに。でもそういう優しいところがいいのよね!!）

見かねたようにクルジュが間に入り話を進めた。

【ダティス】「そうですな、軍事的には有効だと考えます。纏めて一挙に叩き潰せるならそれに越したことはありません。隠れながら戦う敵を虱潰しにするのは厄介ですから」

【クルジュ】「そうか！」

【ダティス】「飽く迄も軍事的な観点のみの話ですが」

【クルジュ】「そうか……」

幾ら戦略上有効とは言え、ナサールの名誉に大きく傷を付けかねない作戦を採用するのは躊躇われた。アイーシャ以外は。

【アイーシャ】「ダティス将軍のお墨付きも頂けた事ですし、私の作戦は採用で宜しいかしら」

【ナサール】「……」

ナサールは唇を噛み締め、アイーシャを睨みつけている。ダティス将軍も渋い顔だった。

【クルジュ】「うーん……アイーシャの考えだし、僕も一番良いんだと思う。でもナサール殿にばかり負担させるわけにはいかないよ。だから、ナサール殿の判断ではなく僕との協議で決まったという形にしよう。それと反乱軍との戦いの先陣はナサール殿に任

せようと思う。どうかな？」
　そういうクルジュは普段通り柔和ながらも何処か芯の通った表情をしていた。
【ナサール】「殿下……」
【ダティス】「異論御座いません」
　ナサールは共に泥を被って自分を助けようとしているクルジュに強い感銘を受けている様子だった。君主が家臣と共に在る。その姿にダティスも満足気に頷いている。
【アイーシャ】「クルジュ様……」
【アイーシャ】（それじゃあクルジュさまの名前にも傷がついちゃう……けどクルジュさまが決断なされた事なのだから仕方ないわ。それに、あんなにイイ男の顔で言われちゃ何も言えないわぁ～ん）
◇　◇　◇
　結果としてアイーシャの策が採用され、クルジュは家臣達から信頼という大きな力を得ることになった。
　トゥラノ州を賊徒から取り戻す戦いの日は近い。

七幕

真暦１９７１年６月、アイーシャの策に従い、トゥラノ州都ガズナからナサール将軍ら守備隊が撤退した。ナサールの無念と残される住民の冷たい視線を後に残して。

クルジュを司令官とする遠征軍一万人はガズナ守備隊３０００人と合流し、来る決戦に備えて準備を整えていた。

放棄されたガズナへは入れ替わるようにしてゴンドファルネスら反乱軍が入城した。ガズナの陥落でそれまでバラバ王国に従属していた日和見豪族は挙って反乱軍へ加担した。

そんな事情も加わって当初は統率を保っていた反乱軍も都市の空気に触れ瞬く間に弛緩した。さらに長い戦争と反乱で豪華な富や贅沢な食事に飢えていた反乱軍兵士は中心都市ガズナの物資を奪い始めたのだった。ガズナ市民との対立も深刻なものとなるのに時間は掛からなかった。

反乱軍の首魁ゴンドファルネスは現地民の支持こそ反乱には元も重要だと理解していたため、これら兵士の暴走を押しとどめようと図った。だがその試みは難航した。

兵士たちは略奪を望み、彼らを率いるべき豪族の長たちはこれを奇貨としてゴンド

ファルネスから権限を奪おうと狙い敢えて放置していたのだった。
ゴンドファルネスは焦った。このままでは今までの勝利がフイになる、自分の地位が奪われる、よもすれば暗殺されかねないと。
ゴンドファルネスは取り急ぎ兵を纏め、他の豪族達を説き伏せて出陣を承諾させた。ガズナ奪還を図っているはずの討伐軍を撃退し、さらなる勝利を手にすべしと叫んだのだった。
全てアイーシャの計略通りに事が運んだ。
◇　◇　◇
ゴンドファルネスは集結させた反乱軍２万人を率いて州都ガズナを出立した。数は多いが地方豪族の私兵、異民族の傭兵、占拠した都市の民兵などからなる寄合（よりあい）軍だった。殆どの兵は軽装で足が速く、これまでのようなゲリラ戦では無類の強さを発揮していたが正面切っての決戦ともなればどうなるかはわからなかった。
ガズナから東に数十キロ離れたキルクーク平原にクルジュら討伐軍はおり、ゴンドファルネスら反乱軍は戦いを求めて辿り着いた。キルクーク平原に討伐軍・反乱軍は布陣した。
討伐軍の先陣を務めるのはガズナ守備隊長のナサール将軍率いる３０００人の兵士である。歩兵２０００人・騎兵１０００人の混成部隊で、ガズナ放棄の屈辱を晴らそう

と意気軒昂であった。

後陣には王都から派遣された軍勢1万人が布陣した。中央は歩兵隊６０００人が槍と弓を構えて方陣を組み、万が一の為の”砦”を作った。更に本陣としてクルジュ王子、アイーシャ、ダティス将軍が位置し、槍を携えた重装騎兵（カタフラクト）２００騎が旗本として控えていた。右翼と左翼には残りの重装騎兵（カタフラクト）８００騎、弓や投槍を持つ軽装騎兵（シパーヒー）３０００騎が均等に分かれて布陣した。

一方の反乱軍は2万人の軍勢を3つに分け、前衛・中衛・後衛として配置した。

前衛は異民族兵を中心に編成された５０００人、中衛は掻き集めた民兵や豪族の私兵、流れの傭兵ら1万２０００人からなった。

本陣も兼ねる後衛にはゴンドファルネス直下の重装部隊など比較的練度と士気の高い兵３０００人が置かれており、戦局を決める決定打と前衛部隊が逃げないようにする督戦隊としての役割が期待されていた。

◇　◇　◇

キルクーク平原の戦場。

幾つもの旗印が林立し、大勢の兵士が音を立てて隊列を整えている。

太陽の光を反射して鈍く輝く鎖帷子を纏った重装騎兵（カタフラクト）、興奮して嘶く馬に跨る軽装騎兵（シパーヒー）、緊張した面持ちで槍や弓を構える歩兵が大地を埋め尽くしている。

それはバラバ王国軍の側も、反乱軍の側も同様であった。

【アイーシャ】（雁首揃えていらっしゃい、てところかしら。内輪揉めした寄せ集めの軍隊を連れて来てくれるなんてゴンドファルネスに感謝ね。こうまで上手く策がハマると笑っちゃうわねえ）

【クルジュ】「大軍だなぁ……こっちの倍くらいいるんじゃあ……」

【アイーシャ】「敵の兵力は多いですが、それだけです。殆どが流れの傭兵や徴集兵、異民族の同盟者で、まともな兵士など殆どおりません。報奨金や戦利品目当てに寄ってきたクズか戦意のない臆病者ばかり、寄せ集めですよ」

【クルジュ】「確かに……うん、そうだよね！」

【ダティス】「だが油断は出来ませんぞ、殿下。ゴンドファルネスの護衛部隊は我が方の重装騎兵（カタフラクト）に決して劣りません。他の奴らも辺境部族の私兵と言えど数々の戦乱を潜り抜けた連中です。寄せ集めと侮るには危険です」

【アイーシャ】「だが連中は支配権益を巡って争っている。その挙句に出陣したんだからな。統一された行動を取れない奴らなど恐れるに足らない。だからこそ寄せ集めだと言っているのだ」

【アイーシャ】（当たり前でしょ？　あたしがそういう風に誘導したんだから。大体あんた、前に反乱軍なんて恐れるに足らないって偉そうに言ってたじゃないの。もう忘れたの？　ボケてんじゃないわよ!?）
【ダティス】「決起したハリード陛下と戦った敵手は、弱兵の反乱者だ、と侮って敗れていった。今度は我らがその番ではないとは決して言い切れない」
【クルジュ】「……」
【アイーシャ】「油断も侮りもしていない。弱兵は弱兵、雑魚は雑魚、勝てるものは勝てる。正確に評価しているだけよ」
【アイーシャ】（ったく、面倒くさいわね。一々口挟んでくんじゃないわよ、爺さん。クルジュさまに余計な不安を抱かせないでよね！）
【アイーシャ】「何れにせよ、戦いはもう始まる。この期に及んで戦に恐れを為すことなどあるまいな、ダティス将軍？」
【ダティス】「何を……」
　アイーシャの嫌味な言い方にダティス将軍は不快感を示した。
　この行為に大きな意味は無い。ただ苛ついたからやり返そうとしただけだが、こういう所がその美貌と才知に合わぬほどにアイーシャが嫌われる所以なのだ。
【クルジュ】「正直言って僕は怖いよ、アイーシャ……」

【アイーシャ】「ク、クルジュさま。け、決して貴方さまに含むところがあったわけではございません！　初陣が恐ろしいのは誰も同じですから！」
【ダティス】「殿下！　ハリード陛下の御子息が其のような弱気ではいけません！」
　アイーシャとダティスが同時に言った。クルジュはうっ、とつまっている。アイーシャがダティスに殺意を抱きながらフォローしようとした時、ナサールがクルジュ達に近づいてきた。彼は先陣の指揮を任されているが、戦いが始まる前に何か言いに来たらしい。
【ナサール】「殿下！」
【クルジュ】「ナサール将軍」
【ナサール】「殿下、私は貴方に感謝しております。ガズナの件は兎も角としても、こうまで反乱軍の連中をのさばらせてしまったのは私の責任です。先陣という栄光在る立ち位置を与えてくださったこと、名誉挽回の機会を与えてくださったこと、生涯忘れませぬ」
【クルジュ】「うん。信じてるよ。頑張って！」
【ダティス】「クルジュ殿下、そのような軽々しい言い方は……いや、ナサール。殿下のご期待、決して裏切るでないぞ」
【ナサール】「ハッ！　我が武の誉(ほまれ)をとくとご覧あれ！」

意気高く武器を掲げたナサールの目が黙ってみていたアイーシャに向いた時、瞳は憎しみの色を持った。

【アイーシャ】「クルジュ殿下の勝利の為、精々砕身して戦うのだな」

【アイーシャ】（クルジュさまもこんな役立たずに御慈悲をかけるなんて。本当にお優しいわ）

【ナサール】「貴方に言われるまでもない。私と我が兵の武勇、そこで見ていろ」

【アイーシャ】「そうさせてもらおうか」

【アイーシャ】（こいつ、ムカつくわねぇ～。討ち死に見せかけて殺したいわあ～）

そう言ってナサールは前線へ向かった。ナサールの訪問でクルジュは寧ろ戦いへの意思を強めたようだ。

【クルジュ】「皆、頑張っている……ようし、僕も負けないぞ！」

【アイーシャ】「クルジュさま……」

【アイーシャ】（絶対何があっても、クルジュさま、貴方のことは傷つけさせません。貴方に刃を向けるものがいれば、私が必ず殺します。だから安心して初陣に挑んでくださいましね♪）

八幕

ジリジリと照りつけるような南方の太陽の下、両軍は戦いを開始した。

最初に仕掛けたのはナサール率いる討伐軍先陣であった。鬨（とき）の声を上げ、馬を走らせるナサールを先頭にして反乱軍前衛に向かって駆けた。３０００の人馬が地響きと砂煙を上げて突撃する。５０００人と数で勝る反乱軍部隊はこれを正面から受け止め、戦場は直ちに剣戟（けんげき）の音と怒号で満たされた。

暫くは互角の戦いを演じていたが、情勢は次第に討伐軍側に傾いていった。ナサール隊は名誉挽回の意気に燃え、多数の筈の反乱軍を押し込んでいった。

【アイーシャ】（思ったよりナサールは敵を押し込んでる。でも敵軍の方が数が多いし、そもそも前衛しか戦いには加わってないわ。いずれはナサールが前衛を突破して後方部隊に突っ込むでしょうけど、まだ時間がかかりそう。こんなどうでもいいお遊戯はさっさと終わらせるに限るわね）

【アイーシャ】「クルジュ様。残りの部隊も前進させましょう」
　アイーシャはクルジュの方を向いた。
【クルジュ】「前進？」
【アイーシャ】「はい、そうです。前進するのです。先陣が勝っている事で我が方は今この戦いの主導権を握っています。一挙に優勢を拡大すべきです」
【クルジュ】「でも反乱軍も動くんじゃないの？」
【アイーシャ】「勿論動きます。ですがそれは”彼らが動いた”のではなく、”我々が動かした”のです。此方が本隊を動かせば、反乱軍は戦局を決定付けられないように動かざるを得ません。もし後の先（ごせん）を獲ろうと予備兵力を待機させているとしてもです。敵軍の望まないタイミング、望まない戦況で兵力の投入を強制でき、敵の作戦を崩せます。だからこそ、我々が主導権を握ってると言ったのです、クルジュ様」
【クルジュ】「なるほど」
　なるほど納得というばかりに大きく頷くクルジュ。しかしその時もう一人の補佐者が発言した。
【ダティス】「待て、アイーシャ殿。現状でも兵力は向こうが勝っているのだぞ。推測だけで軽々に軍を動かすのは危険だ」
【アイーシャ】「その兵力差を埋める為にも果断に動くべきだと言っているの。その推測

を私が外した事があって？」
【ダティス】「だが我々は決して負ける訳にはいかない。ガズナは敵の手にあるのだから、敗北は致命傷となる」
　アイーシャを苛ついた。この老将の鬱陶しさにはいい加減ヘドが出る。
【アイーシャ】（本当、一々噛み付いて来るわね。大方ハリードの老いぼれ王から私が影響力を持ち過ぎないように釘を刺すよう言われてるんでしょうけど。ま、それはそれでいいけど、私が刺し返さないと思って貰っては困るわ！）
【アイーシャ】「敗北などしない。よしんば負ける事があっても、それは怯懦（きょうだ）がもたらすものよ」
【ダティス】「何だと！　私が臆病者だと言いたいのか！」
【アイーシャ】「誰も貴方の事だとは言って無いわ。でもそういう反応をする人は大抵心当たりがあるものよ」
【ダティス】「この……！」
【クルジュ】「二人とも落ち着いて！」
　クルジュが割って入る。戦の緊張に加えて補佐官二人の論争が止めるという大事に冷や汗をかいている。温厚なクルジュには辛いのだろう。
【アイーシャ】（さっきのナサールの熱気に当てられてクルジュさまは凄く積極的になっ

てる。可愛い。……じゃなくて！　戦いも待ち構えるより打って出る方に心が傾いてるわ。ダティスの慎重策にも不満を覚えてる筈。残念だったわね、爺さん）

実際、クルジュは緊張で冷や汗をかきながらもしっかりと相手を見据えている。

【クルジュ】「ダティス将軍。貴方の考えは分かる。ただ、勝利を手にするのなら手をこまねいて待っているよりも攻めるべきだと思う」

【ダティス】「……」

【クルジュ】「アイーシャは勝ちへの道筋を示して見せた。ダティス将軍は反対だというなら、対案を示せるか？」

【ダティス】「……分かりました。殿下がそう決断なされたのなら私に否やはありません。ですが、本陣を前線に向かわせるのはお止め頂きたい。何よりも殿下の御身が危険でありますし、今本陣まで動くのはナサール殿の勲（いさおし）を弱めてしまいます」

【クルジュ】「うむむ、それは……」

クルジュの目が泳いだ。

【アイーシャ】（クルジュさまが”危険”という言葉を聞いて少し揺らいでしまった。ナサールへの慈悲も出てる。人の言葉を良く聞くのはクルジュさまの良いところなんだけれど、今は少し具合が悪いわね……しっかり後押ししましょう）

【アイーシャ】「これはナサールの為の戦いではない、ダティス将軍。何よりも勝利を、と

言ったのは貴方でしょう。ナサールの事よりも勝利を得ることが重要よ。それに危険と言うけれど、貴方はクルジュ様の勇気を疑っているのかしら?」

【クルジュ】「ダ、ダティス将軍」

ダティスを見るクルジュの目は”僕を信じていないのか”では無く、”やっぱり”僕なんかじゃダメなのかな……と言っていた。

ダティスは折れた。

【ダティス】「……いえ、殿下。貴方の勇気は疑うべくもありません。さあ、決まったとなれば二の足を踏むのは愚将の行い。軍に前進を御命じくださいます」

【クルジュ】「うん！　よし、本隊も前進だ！」

クルジュの命令を各部へ伝えるべく何騎もの伝令が走り去った。クルジュの顔は紅潮し、興奮と緊張の真っ只中にあると一目で分かる。

【ダティス】（やられた……アイーシャの増長を抑えようとしたがまんまとしてやられた。私の考えを利用され、挑発に乗らされ、アイーシャでは無くクルジュ殿下に反対する立場をとらされた。そして折れざるを得なかった。殿下を支える第一の補佐が私では無くアイーシャだと、見せつけられてしまったようなものだ……クルジュ殿下はお優しいし、こういう政情には疎いから気付くことは無いだろうが、それでもアイーシャへの信頼は強くなる）

アイーシャは心でも、実際の目でも。ダティスを冷酷に勝ち誇って見下ろした。

【アイーシャ】（ざまぁないわね。わたしの勝ち！　クルジュさまはわたしのクルジュさまなのよ！）

◇　◇　◇

両軍の前衛が激戦し繰り広げる中、王国軍の本隊が動く。戦いは次なる局面へ嫌が応にでも移らざるを得なくなったのだ。

九幕

討伐軍本隊は前進を開始した。数千の騎兵、数千の歩兵が敵に死をもたらすべく歩みを強める。

敵主力の前進にゴンドファルネスは決断を迫られた。

迫り来る敵本隊に対抗するべくこちらも軍を送り込むか、あくまで戦局を見守り前衛の崩壊を無視するか。

守りを固めるか、逆に攻撃に転じるか。

だが考える時間は殆ど与えられなかった。

討伐軍本隊接近により強まった圧力に耐え切れず前衛部隊が崩れて潰走を始め、背後に控えていた中衛部隊が否応無しに戦闘に突入したからだ。

更に両側面からは重装騎兵（カタフラクト）が軽装騎兵（シパーヒー）の援護を受けて怒涛の進撃を行っていた。

重装騎兵（カタフラクト）は全身を鱗鎧（スケイルメイル）や鎖帷子（チェインメイル）で固め、軍馬さえも鎧を着込んでいる程の重装備で、長槍と剣を主な武器としている。

重装甲と頑健な軍馬の突撃力で敵陣を破砕するのが任務で、正にバラバ王国軍の誇る必殺兵器であった。

しかし一方で維持・編成に莫大な費用が掛かるために数が少なく、その重さから小回りも効かない。その欠点を補う為に軽装騎兵（シパーヒー）や歩兵陣と共同で戦う事が常であった。

鋼鉄の騎馬軍団の接近にゴンドファルネス始め反乱軍の将兵は焦った。そもそも彼らは重装騎兵（カタフラクト）軍団の突撃に撃ち破られて一度はバラバ王国に屈したのだ。押し留めようと必死になり、他の事を考えられなくなるのも已む無しと言えた。

ゴンドファルネスは中衛部隊の一部を切り離し両翼へ回して時間を稼ぎ、更に後衛の精鋭部隊も一部を残して左右に振り分けた。重装騎兵（カタフラクト）の突進に対応出来うるのなど、直下の精鋭・重装部隊しかいなかったからだ。

こうしてアイーシャの狙い通り、反乱軍は否応なしに全軍が戦いに投入された。血しぶきと刃の舞う熾烈な戦闘が全線で行われた。

ナサール率いる討伐軍先陣は士気こそ下がってはいないが開戦から戦い続けている為、流石に疲労が色濃く、攻撃は鈍っていた。だがその事も両翼から重装騎兵（カタフラクト）が猛烈な突撃をかけている状況では今さら反乱軍の有利にはならなかった。

反乱軍は全軍の投入で何とか戦線を保っていたが、それも後一押しで崩れ去るだろう。

◇　◇　◇

【アイーシャ】（戦況はわたしの思った通りに進んでるわ。反乱軍は全兵力を注ぎ込んで戦線を支えている。だからもう反乱軍には予備隊がない。戦線に穴が空いてももう埋める術がない。その上、後衛も投入してしまっているみたいだから戦線を後ろから縛る督戦も出来ない。一度崩れたら、お仕舞いね）

【アイーシャ】「殿下」

【クルジュ】「うん？」

【アイーシャ】「敵は崩壊寸前です。止めを刺しましょう」

【クルジュ】「う、うん？　止め？」

【アイーシャ】「はい。反乱軍が崩れるも時間の問題ですが、何も待ち続ける事はありません」

【クルジュ】「分かった。どうすればいい？」

【アイーシャ】「両翼ではゴンドファルネスの重装部隊がまだ耐えています。ですから目の前の敵中衛部隊を狙いましょう。傭兵と民兵共ですがら、こちらを討つ方が有利です」

【クルジュ】「うん、そうだね。分かった」
【アイーシャ】「ナサールの部隊は連戦で疲労していて突き崩す役目は期待出来ませんから新手を送ります。今、本陣には無傷の重装騎兵（カタフラクト）２００騎がいます」
　そう本陣には旗本として重装騎兵（カタフラクト）の一団がいるのだ。本陣の守りに抜擢されるほどだ、士気・練度共に極めて高い精鋭部隊である。
【クルジュ】「本陣が……突撃を……？」
【ダティス】「……」
【アイーシャ】「クルジュ様の護衛の為に最精鋭の兵（わたしも含めてね）を集めてありますから、この戦力を使わない手はありません」
【クルジュ】「う、うん。じゃあ、ってことは、僕も」
【アイーシャ】「はい。クルジュ様の号令一下、我ら本陣の精鋭軍が突撃を行います。愚かな反乱者どもに引導を渡してやりましょう」
　壮麗な騎兵突撃。それも大将自ら行い、戦闘の結果を決める一撃。
　正しく叙事詩や英雄譚の一場面にあってもおかしくないシチュエーションだ。
【アイーシャ】（クルジュさまだって男の子。英雄譚には憧れを持ってるわ。元より積極的になっている今なら、すこーし煽れば……）
【クルジュ】「よ、よし。僕もやる！　初陣だ。戦うぞ！」

クルジュの手綱を握る手に力が篭もる。声も昂揚して上ずっていた。
【クルジュ】「ただ、その、何て言うかアイーシャがいてくれたら安心だから、その」
【アイーシャ】「？」
【クルジュ】「その、側にいてくれる？　まだ怖いから……」
【アイーシャ】「く、くるじゅさま……」
【アイーシャ】（と、溶ける……とろけるっ！　そんなこといわれたら！　いけない気分を抑えられなくなっちゃうぅぅ！）
【クルジュ】「ア、アイーシャ？」
【アイーシャ】「……はっ、も、もちろん、もちろんです！　クルジュさま！　お側には常に私がおりますゆえ、御安心して戦いにお望み下さい！」
【クルジュ】「良かった！　ダティス将軍も行こう！」
　横で聞いていたダティス将軍もクルジュの戦意自体を否定したりするつもりはないらしい。それどころか若き王子の熱意に当てられて、彼自身も戦いへの意欲を強めているようだった。
【アイーシャ】（ま、クルジュさまが行くって言ってるんだからダティス爺（おきな）ももう逆らわないでしょ）
【ダティス】「……はい、殿下。殿下のその勇敢さ、流石はハリード陛下の御子息という

べき。不肖、このダティスも殿下の初陣に出来る限りの助力を致しますぞ」
【クルジュ】「うん、ありがとう！」
【アイーシャ】（なんでそういう時にあの老いぼれを引き合いに出すわけ？　そういうところがムカつくのよねぇ、爺さんどもは。大人しくクルジュさまを褒めなさいよ。ったく）
何れにせよ、本陣の突撃という案は採用された。
大将であり王子であるクルジュ自ら突撃に加わるというのだ。騎士達の意気が上がらないわけがない　重装騎兵（カタフラクト）達はその練度の高さを示して落ち着いて統率を維持しているが、内心は戦意に燃えたぎり、背後にメラメラと炎が燃え盛っているようにすら見える。
【アイーシャ】「さあ、クルジュ様。ご命令を！」
【クルジュ】「ようし！　行くぞぉ、突撃！」
そういうなりクルジュは腰の剣を引き抜き、飛び出すように馬を走らせた。そしてアイーシャ、ダティスを始め、２００騎の騎兵がクルジュを守るようにしつつ、前線へと突撃を始めた。

十幕

クルジュは勇んで馬を駆けさせているが、初陣でもあり元より才能豊かという訳でもない彼の馬術は、贔屓目に見ても尚危なっかしかった。

とはいえ、クルジュの馬は王子が乗るに相応しい名馬であり、馬自身の動きと判断はクルジュの拙い技量を補って余りあった。更にアイーシャがそれとなく誘導する事で他の兵に衝突もせず、大将として在るべき位置を維持出来ていた。

【クルジュ】（あくく、落馬しないようにするので限界だよ！　そ、それに比べてアイーシャは凄い！）

一方、アイーシャの馬術は文句の付けようがなく、一部の乱れも無い。戦場で全力で駆ける軍馬に跨がっているとは思えないほど見事にバランスを維持し、精鋭揃いの本陣隊の中でも際立って巧みだった。

本陣騎兵隊は中央の歩兵陣を越え、疲労したナサールの先陣を追い抜き、遂に敵陣に達した。

敵陣を構成するのは傭兵や民兵、豪族の私兵ども。装備は雑多で統一されておらず、武具は砂埃でくすんでいる。猛烈な勢いで突撃を掛けてきた討伐軍の騎兵隊を目の当

たりにして、その目には恐怖がありありと浮かんでいる。

【アイーシャ】（一撃で砕いてやるわ、雑魚どもが！）

アイーシャはさっとクルジュの前へ出た。クルジュが入る道を切り開くべく、迷う事なく敵陣へ乗り込んだ。

【アイーシャ】「邪魔だ、散れッ！」

前を遮る敵兵を軍馬の蹄に掛け、容赦無く剣を降り下ろす。

アイーシャはあらゆる類いの武器を使いこなせた。剣、槍、弓、斧、盾に鉄槌（メイス）にナイフ。全ては天賦の才能がの為せる技である。

彼女は中でも剣を殊更に得意とし、この戦いでも愛用の剣を振るった。

剣の銘は”流星（シャハーブ）”。

地上に落ちた隕石から打ち出されたと伝わる無二の名剣である。その切れ味は鋼の鎧さえ切り裂くと畏れられていた。

その剣が敵の頭を兜ごと断ち割り、返り血にまみれた剣先の軌跡はまるで赤い流れ星のようだった。

【アイーシャ】「精々我が剣の彩りになるがいい！」

アイーシャの華麗な剣捌きは敵さえも魅了する絶技。しかし魅そられた瞬間に訪れるのは死である。

敵兵を押し退け、踏み潰し、次々と”流星（シャハーブ）”が切り裂く。他の重装騎兵（カタフラクト）達もまた得物の槍や剣で討ち取っていく。

ただクルジュだけはまだ誰も討ち取れていなかった。彼は馬を駆けさせるのに必死で、剣を振るうどころか取り落とさないようにするので精一杯のようだった。

【アイーシャ】（いけない、わたしったらこんなことしてる場合じゃなかった。クルジュさまに首級を挙げさせて差し上げなきゃ）

首級を上げようとするのは匹夫の勇というもの。大将に求める事柄ではない。

しかし、一つも無いのでは幾らなんでも格好がつかない。特に国を治めようとする者なら尚更だ。”初陣で首塚を築いた”くらいの伝説が必要があってもやり過ぎではない。

【アイーシャ】（ゴンドファルネスがいれば一番いいけど、流石に無理かしらね。それなりの戦士はどこかに……あいつなんか良さそうね）

押しまくられるだけか武器を捨てて逃げる反乱軍兵が大半の中、剣を構え果敢にこちらへ向かってくる騎兵がいた。

アイーシャは巧みに馬を動かし、クルジュの乗る馬を件の騎兵の方へ誘導した。余りに巧みなのでまだ誰も誘導されている事に気付いていない。

【アイーシャ】（さあ、こっちへ来なさいな。よし、かかったわ！）

敵の騎兵が近くにクルジュがいる事に気付いたらしく、馬首を向けた。敵にとっても大将首を狙うチャンスだった。

【敵騎兵】「その首頂かせて貰う！」

【クルジュ】（て、敵がこっちに！　ア、アイーシャ！）

だが敵騎兵の目的は達せられる事はない。クルジュと敵との間にはアイーシャが立ちはだかったからだ。

三人は並走しながら剣を構える。敵兵は先ずはアイーシャを仕留めようと剣を振るった。

【アイーシャ】（この程度でわたしを殺せると思ってるわけ？　あんた何かただの餌よ！）

敵騎兵の剣は全てアイーシャに防がれた。かすり傷の一つも与えられない。苦戦に敵兵の焦りは目に見えて高まっている。

【敵騎兵】「く、糞っ！」

焦った敵騎兵が剣を大きく突き出した。

その瞬間、”流星（シャハーブ）”が煌めいた。

騎兵の腕が剣を持ったまま宙を舞った。切り落とされたのだ。

【敵騎兵】「うがっ！」

そして、アイーシャは馬の速度を緩め、腕を失った敵騎兵とクルジュを並走させた。
【アイーシャ】「クルジュ様、今です！」
アイーシャは叫んだ。
【クルジュ】「！　やぁっ！」
アイーシャの声を聞いてクルジュは反射的に敵騎兵に切りつけた。華麗さの欠片もない太刀筋だったが、今の敵兵を攻めるにはそれで十分だった。
避ける余裕も無い敵兵は顎から肩口まで大きく裂かれた。そして血を流しながら馬から落ち、砂煙の中へ消えた。

暫く敵陣を撃ち破り、反乱兵を討ち取り続けた本陣騎兵団の前から兵がいなくなった。敵陣を突き破ったのだ。後ろを振り返っても武器を捨てて逃げ惑う反乱軍兵士と追撃する討伐軍しか見当たらない。
そこまで至り、騎兵達は馬を止めた。
【アイーシャ】（勝ったわね。他愛も無い相手だったわ。……あら？）
隣ではクルジュが血に濡れた剣を持ち、小さく震えている。
【クルジュ】「……」

【アイーシャ】「ク、クルジュ様？　どうなされました？　ま、まさかお怪我でも!?」
【クルジュ】「あ、いや、それは大丈夫だよ。ただ……」
【アイーシャ】「？」
【クルジュ】「……ううん、何でもないよ」
【アイーシャ】「そうですか、それならよろしいのですが。それよりもクルジュ様、初陣での初首級おめでとうございます！」
【クルジュ】「あ、うん。ありがとう。アイーシャのお陰だよ」
【アイーシャ】「戦いにも勝利致しました！　初陣としてこれ以上無いほどの誉（ほまれ）です！皆、鬨（とき）の声を上げよ！」
【アイーシャ】（やったわ、わたし！　クルジュさまの初陣を見事に飾ったわ！　第一のステップは大・成・功よ！）
オオオー！と共に突撃した騎兵達が叫んだ。勝利の声だった。
だがその中で……
【クルジュ】「……人を切るのは、あんまりいい気分しないね」
と小さく呟いた事にはアイーシャも気付かなかった。

十一幕

キルクーク平原の戦いは討伐軍の勝利に終わった。反乱軍は追撃を受けて壊走、大部分が討ち取られるか捕虜になった。

反乱軍の首魁（しゅかい）ゴンドファルネスは逃亡したが、ナサールに追い付かれ、彼もまた捕縛の身となった。

大敗を喫し主導者も失った反乱軍は忽ちの内に瓦解し、やっと手に入れたガズナも放り捨てて四散した。クルジュら討伐軍は州都ガズナを取り戻し、悠々と凱旋入城を果たしたのであった。

◇　◇　◇

勝利の後には祝賀の宴が待っている。州都といっても辺境であるために王都での宴に比べればささやかなものだが、それでも勝利を飾るには十分なものだった。

勝者にはもう一つの”宴”の権利もある。それは敗者の引見と処遇の決定、すなわち彼らの生殺与奪を弄ぶ時間だ。

勝者の主クルジュの前に次々と捕虜たちが連れられてくる。戦の虜囚なので皆傷付き、血を流している。

そして今回の戦いでは大物の捕虜がいる。ナサール隊長が捕らえた反乱軍の首領ゴンドファルネスだ。

【アイーシャ】「クルジュ殿下。真ん中の男がゴンドファルネスです」

【クルジュ】「彼が……」

ゴンドファルネスは浅黒く日焼けした肌に隆々とした肉体を持ち、こわい髭が顎一面を覆っている。敗北したとは思えない程に堂々とした武人だった。

【アイーシャ】（負け犬の癖にデカい態度してやがるわね。ひざまづいて命乞いくらいしなさいよ）

【アイーシャ】「殿下が慈悲深くも貴様らに謁見の機会を与えて下さった。発言を求める者はおるか」

ゴンドファルネスが一歩前に出た。

【ゴンドファルネス】「貴方がクルジュ王子か？」

【クルジュ】「そ、そうだ」

意外にも紳士的な声色のゴンドファルネス。初の大役にクルジュは緊張している。

【ゴンドファルネス】「それで、そちらのご婦人が噂に名高きアイーシャ姫か」

【アイーシャ】「……」

【アイーシャ】（こいつ自分の立場理解出来てないわけ？　屠殺前の豚が話しかけてくる

とか）

【ゴンドファルネス】「戦場では見事な真紅の流星（シャハーブ）を舞わせても、舌の方は滑らかではないのかな」

【アイーシャ】「そんなに見たいのならばまた見せてやろう。貴様の血でな」

【ゴンドファルネス】「ふん、見た目にそぐわず猛々しい事だ。それにしてもダティス将軍やナサールならともかく、こんな少年少女達にしてやられるとは私も焼きが回ったかな」

　ゴンドファルネスはやれやれとかぶりをふる。

　そんな台詞がクルジュはともかく、アイーシャの癇に障らないわけがない。

【アイーシャ】「口を慎め！　下郎が！」

　アイーシャは腰の剣”流星（シャハーブ）”の柄に手をかける。

【アイーシャ】「クルジュ様。この様な無法者、即刻首を刎ねるべきです」

【クルジュ】「……待って。アイーシャ。彼には僕も聞きたい事があるんだ」

【アイーシャ】「えっ？」

　意外なクルジュの毅然とした発言にアイーシャはどきりとする。

【アイーシャ】（何だかいつも以上に凄く格好良いわ、クルジュさま）

　言われた通りアイーシャは手を剣から放す。

【ダティス】（殿下……）
【ゴンドファルネス】「……」
今までにないクルジュの具合に自然と皆静まり、事態の成り行きを見守った。
【クルジュ】「ゴンドファルネス。何故、お前は反乱を起こしたのだ？　民の安寧を損ない、王国の平和を害するだけではないか？」
【ゴンドファルネス】「それはこちらの台詞ですな、王子」
【クルジュ】「どういう意味か？」
【ゴンドファルネス】「そもそも何故、われらの土地へ攻め込んできたのか。貴方に言ってもせんないことかもしれないが、事の発端はハリード王の行いではないか」
ゴンドファルネスは言った。
【ゴンドファルネス】「ハリード王は王国の再統一と言う大義を掲げ、このトゥラノを攻め、支配した。ハリード王は確かに敬意を示すべき武人ではあった。トゥラノもかつては王国の一部ではあった。だが、だからと言って戦争を起こしてよい理由にはならない」
【クルジュ】「トゥラノ人からしてみればバラバ王国こそが民の平和と安寧を損ねた張本人だと言うのか」
【ゴンドファルネス】「そうです。そして支配者となったハリード王は何を与えました

か」

【クルジュ】「父上、ハリード王は平和をもたらした筈だ、と思う」

　回答はやや歯切れが悪い。ただそれは誤りによるというよりも、正しい答えに達しようとしているがゆえの立ち止まりの印象だ。

【ゴンドファルネス】「王国は他の地を攻める為に税と兵を奪い持って行き、その代わりに我らを監視する役人だけ置いていった。それを彼らは平和と呼びました」

【ナサール】「……」

　ナサールが複雑な表情をしている。ゴンドファルネスの言う監視する役人その人なのだからやむ無しだろうか。

【ゴンドファルネス】「我らは我らの為に動いたのだ。皆がそうであったかと言われればそうでないものもいたかもしれない。だが少なくとも私はトゥラノの民の為に立ち上がったのです」

　ゴンドファルネスは狼狽える事もなくはっきりと告げる。本心からそう思っているのが伝わってくるようだ。

【ゴンドファルネス】「それを自分勝手な戦いと言うのならばそれでも宜しい。私は恥じてはいません。そして、最後に言いたいのはですな、王子。支配者となった貴方はまだお若く、時間がある。だから民の事をもっと見て欲しいのです。どうか荒野を作ってそ

れを平和と呼ばせることの無きようお願いしたい」
ゴンドファルネスの演説は終わった。
抑圧者の言葉に場は静まり、クルジュも渋い顔をして考え込んでいる。
【アイーシャ】（ふん。随分長いこと話し続けたわね。あんたに対する答えは一つだけ。お前らのことなんざ知ったことか、よ）
ただアイーシャだけは微塵も彼らと思いを共にはしていなかった。再び手を剣に掛ける。
【アイーシャ】「言いたい事はそれだけか？　もうよい。処刑場へ連れて」
【クルジュ】「アイーシャ」
クルジュはまたもアイーシャを止めた。
今度は先程以上にはっきりとした態度で、王者の風格を感じさせた。
【アイーシャ】「は、はい？」
【クルジュ】「僕はそんな命令は出していない」
【アイーシャ】「え、は、はい、クルジュさま」
【アイーシャ】（ク、クルジュさまに怒られちゃった……ああっ！　でも、こんな激しいクルジュさま初めて！　凄く良いよおっ！）
心のなかでアイーシャは悶えた。

クルジュはゴンドファルネスを見据える。
【クルジュ】「ゴンドファルネス。私はやはり君らの行いは平和を損ねる反乱だと思う。現に父上の覇業によって王国からは大きな騒乱が消え、再び繁栄を取り戻しつつある」
【ゴンドファルネス】「……」
【クルジュ】「だが君らの苦しみは分かる。大業を成すまでの間には多くの犠牲が必要だが、一方的に犠牲にともされた者たちにはただの収奪だろう。その意味では父上の統治には足りないものがあったのだろうと思う」
そこで一息つき、クルジュは言葉を続ける。
【クルジュ】「だから私はこの地を治める上で、誰かをただ犠牲にして平和と繁栄を勝ち取るような事はしたくない。ただ、それは言うだけなら簡単だが、実際は難しいと思う。僕はまだ若く、経験も能力もない。ゴンドファルネス殿、どうか手を貸して欲しい」
ゴンドファルネスは少し考え、頷いた。
【ゴンドファルネス】「……ふっ、どうやら、私の前にいるのは想像以上に大したお方のようですな」
そして、すっと跪く。
【ゴンドファルネス】「この不肖ゴンドファルネス、全てを貴方に捧げましょう。如何様にでもお使いください。クルジュ殿下」

【クルジュ】「うん、頼む」
　クルジュの予想外の器に皆感嘆を隠せなかった。幾人かを除いては。
【ダティス】（やはり、王子たちの中で最もハリード王に近い。クルジュ殿下こそ大器。付いてきた甲斐があった）
【アイーシャ】（クルジュさま……ああ、やっぱり王に相応しいのはクルジュさまだけよ。待っててね。必ず玉座を貴方にあげますから）
　大仕事を終えたクルジュはふうと息を吐いて、ちらっと横に侍るアイーシャを見た。
【アイーシャ】「クルジュさま……」
【クルジュ】「あのさ、アイーシャ……これからも手伝ってくれる？」
　さっき厳しい口調をしたのをすまなく思っているようだ。もっともアイーシャの方はクルジュが自分にすまないと思っている方が大事だった。
【アイーシャ】「も、勿論です！　クルジュさま！」
【クルジュ】「うん、ありがとう」
　クルジュは安心したように、年頃の若い笑みを見せた。

十二幕

真暦１９７１年９月、クルジュ達がキルクーク平原で反乱軍を撃破してから早３ヶ月が経った。トゥラノ州は完全にではないにして戦火を収めて平和を取り戻しつつあり、民の暮らしにも活気が出てきていた。

安定が早期にもたらされたのにはアイーシャや主に彼女が連れてきた行政官の尽力もそうだが、クルジュが採用した温情政策によるところも大きかった。かつての反乱軍の首魁ゴンドファルネスはクルジュに許されて幕下に加わった後、トゥラノ豪族の説得と懐柔に尽力していた。反乱に加わっていたトゥラノ豪族たちもゴンドファルネスが許されたのならと次々と降伏し忠誠を改にしていた。クルジュの決断が正しかった証左であった。

州都ガズナはそれらトゥラノ再興の象徴と言え、中核都市として再び繁栄し始めていた。特にトゥラノ全域から産物が集まる市場は如実に成長を示しており、重要度は非常に高かった。

定期的に統治者、即ち太守（サトラップ）クルジュと彼の腹心アイーシャ姫が視察に訪れる程であった。

【アイーシャ】（きゃーっ！　今日もクルジュさまとデートよぉ！　トゥラノは埃っぽいしガズナもド田舎で何もありゃしない最低な土地だけど、これだけで来た甲斐があるというもんだわ！）

……視察に、訪れる程であった。

【クルジュ】「市場も人も物も増えてきたね。前は閑散としてたのに」

【アイーシャ】「そうですね。統治が上手くいっている証拠です。クルジュ様が素晴らしい君主であるからこそ、です」

【アイーシャ】（やっぱりあなたこそが王に相応しいのですよ、クルジュさま!!）

【クルジュ】「いやあ、皆のおかげだよ」

クルジュは謙遜でも何でもなくそう思っていた。彼は自身の能力を良く理解していた。自分には出来ないことが沢山あると分かっていた。

具体的な方法や実行はアイーシャやダティス、ナバールのようなより能力のある人間に任せていた。

そのやり方は下級役人などに対しても同様で、現地民を信頼し、彼ら流のやり方を受け入れていた。クルジュ元来の慈悲深さや柔らかさも大木な助けになっていた。

実際、数ヶ月の統治にも関わらずガズナ市民はクルジュを非常に気に入っていた。親愛の情を籠めて”若様”と呼び掛けるのが常になってさえいた。

【商人】「若様！　今日もお元気そうで何よりです！」
【クルジュ】「うん、ありがとう。君も息災無いか？」
【店主】「若様！　うちの一押しのナツメやしです、是非どうぞ！」
【売り子娘】「若さ、あ……ク、クルジュ殿下」
【アイーシャ】「……」
　アイーシャの鋭い眼光に売り子娘は怯えてしまった。アイーシャはどんなに小さな相手でもクルジュの側に女がいるのが許せなかった。
【アイーシャ】（わたしのクルジュさまに近付くんじゃねーわよ！　町娘風情が分をわきまえろ！）
【アイーシャ】「先へ行きましょう。回らねばならない場所はまだありますから」
【クルジュ】「うん。そうだね。行こうか」
　市場には多種多様な商品が並んでいる。小麦や大麦、肉や野菜の様な主要食品だけでなく、農具や装飾品などの金属類や酒類もところ狭しと売りに出され、新鮮な果物すらも販売されていた。　何よりもこれらの商品を産出し、都市に運べるまでに治安が回復した事を示していた。
　クルジュの視線があるものに止まった。
【クルジュ】「あ、甜瓜（メロン）……」

【アイーシャ】「どうなさいました?」
【クルジュ】「あ、いや、マルドゥーン兄さんが好きだったなと思って。兄さん、大丈夫かなあ……」
【アイーシャ】「マルドゥーン殿下ですか。確かにご心配でしょう。ですがハリード陛下も御出陣なされた事です。きっと大丈夫でふ」
トゥラノ平定と同時に行われていた北の遊牧民ナグハ族との戦いだが、大成功を収めたクルジュとは異なりマルドゥーン敗北の報告が届いていた。
マルドゥーンは当初こそ優勢に進めていたがナグハ族の突然の奇襲で甚大な被害を被り敗走したとの事であった。
事態を重く見たハリード王は老齢を押して自ら出陣し、王太子の失敗を挽回しようとしていた。
世間の反応は他所に、クルジュはただ父と兄の事を案じていた。政治的思考はクルジュの持ち合わせる性質ではないのだ。
【クルジュ】「北の騎馬民族は勇猛だ。父上でもそう簡単には勝てないんじゃ……」
【アイーシャ】「ただの野蛮人ですよ、殿下」
【アイーシャ】(その通り。怖れるに足りませんわ、クルジュさま)
【クルジュ】「歴史的にも何度も攻めてきて、その度に我らが王土は被害を受けてきた」

【アイーシャ】「そしてその度に打ち負かして来ました。我々がです。我が軍が追い散らした西方人（デュロ）でさえ北の遊牧民には勝っているのですよ」
【アイーシャ】（ま、あっさり負けてくれるならそれはそれでいいのよね。えっ、どっちが、って？　分かるでしょ）
【クルジュ】「うーん……そうだけど不安だなあ」
【アイーシャ】「殿下。何かあったとしても、立ち向かうときはこのアイーシャが御側におりますわ」
【アイーシャ】（計画は順調に進んでいるわ。玉座への道ももう長い道程ではないわね。こちらの第二段階も進めていかなくては）
　アイーシャの言葉にクルジュは安心を得たようで、多少表情が和らいだ。案じているのは自分やアイーシャの身ではなく家族の安否だとは言え、慰めにはなったようだ。その事実はアイーシャに少なからぬ快感と嫉妬を覚えさせた。
　その時、一人の兵士がクルジュとアイーシャに近付いてきた。身なりから指揮官クラスの上級士官だと分かる。わざわざ士官を寄越してくるのだから大した事態なのだろうと察せられる。
【アイーシャ】（まあ、わたしは何なのか分かっているけどね。第二段階が来たのよ）
　用件はアイーシャには分かっていた。そして分かっていていても二人の時間外邪魔

されたこと事態にはイラつきを覚えた。
　士官は急いでいるのか小走りである。
【士官】「殿下、アイーシャ様。巡回中申し訳ございません。火急の用件でして」
【クルジュ】「構わない。何かあったのか？」
【士官】「隣国のオドニアから使者が参っております。それも……」
【アイーシャ】「それ以上はこの場で云わなくて宜しい。大体想像はつく」
　アイーシャは士官の言葉を遮った。
【アイーシャ】「クルジュ殿下。（残念ですが！）官邸へ戻りましょう」
【クルジュ】「うん、分かった。想像はつくって言ったけど、何なの？」
　クルジュはまだ分かっていないらしい。ある意味でこの事は彼の本質を表している。
アイーシャにはそれも含めてクルジュを愛おしく思っていた。
　アイーシャは僅かな笑みを浮かべ、クルジュ以外には決して使わない柔らかな声色で答えた。
【アイーシャ】「戦争ですよ、クルジュ様」

幕間　バラバ王朝史１

東の大地。

”バラバ王国”、”バラバ王朝”、”ホルシード王国”などと多くの呼び方をされている彼の地は太古の昔から人々の命と血を以て発展してきた。

そして積み重ねられた死は今では”歴史”と呼ばれている。

◇　◇　◇

西にトランクィルス海、東に荒野と象牙の地（オドニア）、北に山脈、南に砂漠と周りを隔絶する地形に囲まれた大陸中央部は古来より太陽の地（ホルシード）と呼ばれ、スグリス河とエフラト河の２本の大河が流れる文明発祥の地の一つであった。

南には隣接してメロエと呼ばれる地域があった。もう一つの大河ニールが潤す天然の穀倉地帯であり、ホルシードと並ぶ文明発祥の土地であった。

ホルシードもメロエも他の世界と同じように無数の民族、無数の都市、無数の国、そ

して無数の王朝が栄え滅びていった。

メロエでは最早記録も残らないほど古くから王朝が存在し、一つの国として纏まっていた。豊かな農地を背景に国力を蓄え、積極的に対外進出を図ったのも自然な成り行きであった。

一方、ホルシードの中でも特に早く繁栄を見せたのは西岸のシラエアと呼ばれる地域であった。トランクィルス海の沿岸交易、南のメロエとの繋がりで文明の発展が加速していったのだ。統一の機運が強かったメロエとは異なり、シラエアの諸国は殆どが都市国家として発展した。都市毎に王や君主を戴き、シラエア諸国は時に戦争をし、時に平和を享受し、時に大国メロエに対抗して同盟を結成した。

両文明は馬を家畜として使う事を覚えると、戦争では馬に牽かせた戦車を用いる様になった。じきに青銅器だけでなく鉄器も参入し始め、戦争は苛烈さを増し続けていった。

文明の勃興と王国の成立以後、数百年に渡って大国メロエとシラエア諸国群のみで安定していた大陸情勢が大きく変動する事件が起きる。北方から異民族がなだれ込んできたのだ。

彼ら異民族、クルディス人は騎馬民族の一派であり、馬に直接乗って戦う技術を持っていた。馬という武器の取扱いに関しては戦車しか知らないメロエやシラエアにはよ

り軽快な騎兵の前に劣勢を余儀なくされ、シラエア地方は瞬く間にクルディス人の膝下に捻じ伏せられた。メロエ王国もニール河下流域と主要都市を奪い取られ、更に南部のモエリス湖一帯のオアシスへと逃れる羽目になった。

こうしてシラエアとメロエの一部を制圧したクルディス人は王国を築き、北西のゴンディノ地方や東のペルシス地方へも進出を行った。

元々騎馬民であったクルディス王国は十分な統治ノウハウは持っておらず、政治力という点では征服したシラエア諸都市やメロエ地方に比べて圧倒的に劣っていた。その為、クルディス人達は間接統治を採用し、諸王をそのまま属国として統治を任せ、貢納を受け取る事で満足していた。進出した先のゴンディノやペルシスでも事情は変わらず、同じクルディス人の新たな国でさえも統治を任せ事実上の独立国として置いていた。

また人的資源でも劣るクルディス人は傘下の諸民族を登用することに躊躇いを持たず、特に文明の進んだシラエアやメロエ人は行政官や官僚として積極的に用いられた。

だが、ホルシードの支配者となったクルディス王国も間も無く衰退し分裂していった。諸民族の登用や間接統治は支配の不安定さや反乱を呼び起こす原因ともなったのだ。

幕間　バラバ王朝史2

一世紀ほども経つとクルディス人の支配も衰えていった。もとより間接・分権統治指向の強い政権である以上、分裂の勢いもまた早かった。

クルディス王国の衰退に乗じて各地で反乱・敵国の反撃が始まった。南のモエリス湖付近に逃げ延び力を蓄えていたメロエ王国がニール河流域の奪還に軍勢を繰り出し、東方のペルシス地方に分立したエグバン朝や西方のゴンディノ地方に分立したサラザニア朝が挙兵した。クルディス王国は瞬く間に崩壊し、いくつかの英雄譚とそれを遥かに上回る悲喜劇を生み出して消え去った。クルディス本宗家の王族は殺されるか、各勢力に傀儡として取り込まれ消滅した。

ホルシードの地にはメロエ王国、ペルシスのエグバン朝、ゴンディノのサラザニア朝の三つ巴が出現し、特に各勢力の中間に位置し豊かなシラエア地方で激しい争いが繰り広げられた。シラエアの諸都市国家は三勢力の間で翻弄されることになるが時に手痛い打撃を与え、征服者達の鼻を圧し折りその意地を見せつけた。

互いに一進一退の戦況が再び１００年ほど。膠着状態が崩れたのはペルシス地方からであった。この頃には精強を誇ったエグバン朝も衰退の一途を辿り、各地の反乱や独

立運動に手を焼いていた。”ジェタの一族”と呼ばれた小部族もまたそんなエグバン朝傘下勢の一つであった。

だが”ジェタの一族”は突如として強大な力を得るに至った。伝説では空から神が下りてきたとか、御光と共に知恵や力が満ちたとか言われているが詳細はわからない。ただ歴史的事実として、百人にも満たない彼ら”ジェタの一族”がエグバン朝の軍隊すら打ち破る戦力を保有したということである。特に彼ら一人一人が持っていたと伝わる”火を噴く鉄の槍”は”ジェタの一族”の象徴となった。

エグバン朝は勇戦虚しく”ジェタの一族”に敗れ、周辺部族や独立勢力と共に取り込まれ融合させられた。

”ジェタの一族”は支配下に治めたペルシス地方を中心に王国を成立させた。中でも指導的立場にあった家系が王家となり、その家名からバラバ王国と命名される事となった。以降ホルシードで広く用いられる”真歴”はこの年を元年としている。

初代王クセルクセスは神の化身かと思われるほどに数多の伝説に彩られている。曰く雲をつくような巨躯であり、曰く眠らずに国の統治に邁進し、曰く人の心も見通すことができる等々だ。それらが事実であるか否かは最早不明であるが、辺境の一部族に過ぎなかった”ジェタの一族”を歴史の表舞台へと導き、数世紀に渡る栄光をもたらすバラバ朝ホルシード王国の礎を築いたことは確かなのだ！